

まんだら通信

第214号 (通巻249号)

平成26年04月 西暦2014年 佛暦2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



優しく強い日本の心

猫背で、苦虫をかみつぶしたような初老の保安官の退職の日。永年夢に見ていた緑豊かな牧場に出発しようとするその時、以前牢屋にぶち込んだ悪者が釈放されて、仲間と四人で正午の汽車で仕返しに来る。「あなたは、もう保安官じゃないのだから、勝ち目のない撃ち合いなどせず、このまま町を出ましようよ」と必死に説得する奥さんに「悪人どもをのさばらせては、この町がまたダメになる」と決心して町の人たちに協力を頼むけれども、普段は正義の味方のようなことを言う人も、みんな尻込みをしてみまい、結局一人で立ち向かうこととなります。

保安官夫婦は静かに町を去ってゆく。主演はゲイリー・クーパーと、のちのモナコ公国王妃グレイス・ケリー。お気付きの通り、主題歌と共に西部劇の不朽の名作といわれる『ハインーン』（真昼の決闘）のあらすじですね。大東亜戦争が始まった時、インドネシア沖の海戦で日本の海軍に撃沈され、二時間も漂流していた、イギリスの駆逐艦エンカウンターに乗組員四十二人を、戦闘中にも関わらず全員救助し、重油で汚れた身体を洗い、自分の船の乗組員の衣服や食料を与えた上、甲板に集まった捕虜に「諸君は勇敢に戦った。今や諸君は日本海軍の名誉ある賓客である」と、流ちょうな英語で挨拶し、捕まれば殺されると思っていたイギリス軍捕虜を感動させた日本の駆逐艦『雷』の艦長、山形県高島町生まれの工藤俊作少佐もいます。このように「他人の不幸を黙って見過ごせない」性格は、民族や国が違っても「例え真似できないでも、私もそのようになりたい」と思う気持ちと同じです。

東日本大震災の時、自分の仕事を投げ出して日本中からボランティアが駆けつけましたし、世界では常識になってきている火事場泥棒や暴動などは全く起きませんでした。当たり前すぎて、私たちは余り気が付きませんが、日本人は世界でもまれな、このような義侠心と公德心を自然に身に付けている、一際変わった民族です。これは私がいい加減を言っているのではなく、世界中から取材に集まった、新聞やテレビや雑誌の記者たちが、齊しく言っていることです。

日本人のこの性格は、ずっと昔から身に備わっていて、八百年前のキリシタンのパテレンも、幕末に来日した外人さんもみんな、日本は素晴らしい国だといっています。ところが大東亜戦争の話になると「我々日本はアジアの国々を侵略し、周りの国民に大変な迷惑をかけた悪い国」と思っている。未だに「ごめんなさい」を言い続けています。世界が誉めそやす日本が、この時だけ突然悪者になるなんて、おかしいとは思いませんか。種明かしをすれば、アメリカは日本に勝ったものの、その強さにホトホト閉口しました。そして、日本が二度とアメリカに刃向かわないためには、日本精神を骨抜きにすることが大事だと気付いて、占領政策を立てました。それは「日本の邪悪な軍国主義者が善良な国民をだまして戦争に駆り立てた」というもので、WGIP（ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム）といっています。その中身は、日本の伝統文化の否定、歴史の改ざん、東京裁判など広い範囲になりますが、中でも学校教育と新聞・ラジオで徹底的に「日本は悪者」を教え続けました。この政策は見事に当たって、日本人は未だに「ごめんなさい」を言い続けています。あの戦争の本当の姿は、アメリカが言うことの正反対で、どうしても戦争を避けた日本を引きずり込んだのはアメリカでした。韓国が居丈高に言い続ける『従軍慰安婦問題』は、朝日新聞が最初に言いふらしたことですし、『南京大虐殺』も朝日新聞の記事にしましたが、歴史を多少でも勉強した人には、どちらも事実無根であることは学問上も明らかなのです。にもかかわらず、今の内閣がウソと知りながら撤回できないのは、日本の中に朝日新聞の言い分を正しいと思っている人が、未だに沢山いるということの証明です。この際、時間はかかっても、正しい歴史を自分で勉強して誇りを取り戻さなければ、私たちの子孫は謂われのない悪者の負い目を背負ったまま、未来永劫生きてゆくという、残酷なことになります。

▼花に嵐などといいますが、今年の桜は満開になる前に散ってしまい、あまり外に出ない身にはあつけないことでした。それにしても、花の咲き具合がニュースになる国ってあまりないのではないのでしょうか。

気象庁の、つまり国のお役人が二人がかりで、咲き具合を調べに靖国神社まで出向き「まだ三輪ですから」といって午後また来て「五輪咲きましたから開花宣言します」なんて、考えてみれば面白い国です。而も時間ごとのニュースにも取り上げて。南北に長い日本列島。今年も大勢の桜の“追っかけさん”が、鹿児島から北海道の根室まで追跡中でしょう。

▼2,580年前の今日4月8日。北インドのシャカ国で、待ちに待った王子様がお生まれになりました。のちのお釈迦さまですね。王様や国民の熱い期待に背いて出家し、長い修行の末に、小さな国よりも、世界を救う道をお選びになりました。

世界は今、一神教同士が血で血を洗う殺しあいが続いています。慈悲の心で、敵を作らない佛教でしか世界の平和は望めません。▼葬式と一口に言いますが、生きている間にお世話になった沢山の人たちへのお別れと、仏さまの懐へ帰る儀式です。ですから本来は、家族だけのお葬式『家族葬』はないのです。

今、何千年来の“亡くなった人を送る”しきたりが大きく変わろうとしています。まさかの時は、業者さんに丸投げではなく、何はともあれ身内同様の、出身地のお寺さまに連絡することが肝心で、費用の話などはその次ですよ。▼今月の野草はシロバナタンポポ【キク科タンポポ属】です。近ごろでは寧ろ珍しい日本在来種で、関東から九州まで分布しているようですが、数は極く少ないようで、60年余り前にこのお寺で見つけてから、毎年増えもせず減りもせず、同じ場所に数株が咲きます。草丈は一般のタンポポより大柄です。2014/04/08 龍渉



余滴

につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊ほうほう

第九十九話 誕生

今年は東京に大雪が降りまして、大変なことになりました。

テレビでは、前夜から昭和二十六年二月の東京の記録的大雪の白黒の映像を流しておりましたが、私はそれを見てちよつと胸が熱くなつてしまいましたね。なぜかと言うと、その日は私の一番下の妹が生まれた日だったからです。

私は、その時、小学一年生。六畳と四畳半の部屋に台所という狭い家の中でいま、子供が生まれるという間際ですから、お産婆さんに「外に行つてなさい！」と言われたのですが、大雪ですので、いつものように遊びにいけません。しかたなく、父親がお湯を沸かしている土間の隅っこで、ただ寒さに震えながら、いつまでも降り続ける雪を眺めていた記憶が蘇つたのです。

そのうち、オギャーという声が出て、妹が生まれました。その妹も数年前にガンで亡くなりましたが、私だけでなく、きつと関東近郊の多くの人がかつての大雪の日の思い出をお持ちでしょうね。

今日は、平成二十六年二月十五日、あの大雪の日に山梨県で実際にあつた「いい話」をご紹介します。

十四日未明から降り続けた雪は、まったく止む気配もないまま、あたり一面を銀世界にしていきましました。天からの冬の贈り物は、家の中の人はもちろん、外の鳥や動物たちにまるで白い魔法をかけたかのように、静かな眠りの界へと誘つていったのです。

そんな中、ひとりだけ眠れない若い女性がありました。吉沢ひとみさん(仮名)です。なぜなら、彼女はまさに臨月、いつ産気づいてもおかしくないような状態だったか

らです。ひとみさんは、埼玉県に住んでいるのですが、初めての出産ということと山梨県の実家に里帰りしていたのです。

(こんな時に生まれたら、どうしよう!) 困つたことに、不安が的中するのが世の常。まだ真つ暗な午前四時ごろから陣痛がはじまりました。「お母さん、お母さん!」ひとみさんの苦しそうなうめき声で、隣りに寝ていたお母さんも目を覚まします。

「大丈夫? ひとみ」。お母さんは部屋の明かりをつけ、娘の顔を覗き込みます。そして出産が予定より早まつたことを察知したお母さんは、あわてて救急車を呼びました。

「すみません、娘が苦しがつています。子供が生まれそうなんです! 早くかかりつけの△△病院に連れて行つてほしいんですが……。家は○○地区の××番地です」

「了解しました」
ところが、普通なら十分で着くはずの救急車が、三十分経つてもやってこない。お母さんはまた電話をします。「さつき、娘の出産で救急車をお願いした者ですが……。」「そちらに向かつていますので、もう少しお待ちください」。その繰り返しか進めない。悪いことに、ひとみさんの実家は県道から約一キロの山道に入った先。すでに、あたりは一メートルを越す積雪。なんとか目指す山道に入ろうとしたけれど、車は進めないんですね。

やむを得ず、救急隊員は担架を抱えて腰近くまで積もつた雪をかき分けながら山道を登りはじめました。
ひとみさんの家族も総出で自宅前の雪を懸命に掘つて、隊員たちの到着を待ちました。こうしてひとみさんを担架に乗せたのが、朝の六時。隊員たちは、ひと

みさんに乗せた担架を腰のベルトに固定して、山道を下つていきました。しかし、大雪の降りしきる中、下り坂を担架で人を運ぶのですから大変です。十分進んでは一分休み、また十分歩いては一分休むの繰り返し。その間、隊員たちはひとみさんに「がんばろうね」としきりに声をかけたそうです。それでも、三十分かかって、まだ二百メートルしか進めません。

近所に住む土建屋さんが見かねて、「待つて、いま、おれの重機で除雪してやるから」と救急車が待機している道路までの八百メートルの道を重機で除雪してくれたそうです。

いくら重機といえども八百メートルの山道の除雪は、かなりの時間がかかりました。

「大丈夫ですか、もう少しで救急車に乗れますからね!」「はい、ありがとうございます」

隊員はひとみさんを励まし、寒くないように毛布を何重にもかけてあげました。こうして、ひとみさんは、午前八時半、県道に待つていた救急車に乗れたのだそうです。

救急車は、ひとみさんがかつていた町の産婦人科に向かいます。八キロ先ですから、ふだんなら十五分もあれば着く距離です。ところが、しばらく走つたところでタイヤが雪のくぼみにはまり立ち往生してしまいます。すると、たまたま役場から頼まれて仕事中の除雪業者が重機を使って救急車を引っ張つて脱出させてくれました。

隊員がひとみさんの陣痛の間隔をはかるとそれまで五分だったものが一分になつていました。もはや、いつ生まれてもおかしくありません。
午前九時半、目指す病院が見えてきました。しかし、そこに向かう生活道路が除雪されていない。隊員たちは、ふたた

び担架を腰に固定すると、ひとみさんに乗せて、病院に急ぎました。息も上がつていません。病院の入口には、知らせを受けた医師や看護師たちが吹雪の中、頬を真つ赤にしなが待つていました。担架は見えたが、なかなかたどりつかない、その時、病院の近所の人たちから声が上がつたのです。「おくい、みんな、集まれ! 急患だ、道を作るんだ!」。五、六人の男の人たちが、まるで力比べをしてるように、必死でスコップで雪を掘り、担架の進む道を作つたのです。道が出来た。

「すみません、すみません」。ひとみさんが何度も何度もそう言うのと、隊員が言つたそうですよ。「何言つてるんですか、いま、一番大事なのは、あなたの身体ですよ。がんばつて、いいお子さんを産んでくださいね。そのために、あの人も必死で雪かきをしてくれているんですから」

産婦人科に運び込まれてまもなく、大きな産声が聞こえました。

「ああ、よかつた。皆さんに除雪していただかなかつたら、間に合わなかつたな」

「もし、担架の上で生まれていたら、赤ちゃんの体温が低下して危なかつたなあ」

救急車の隊員たちは、互いにそう言いながら、また大雪の中、サイレンを鳴らして、次の搬送に向かつたそうです。

今月も、発行所のMOKU出版と三遊亭鳳豊師匠のご好意で、MOKU4月号の全文を転載させていただきます。有難うございます。